

筑波大学附属盲学校資料室所蔵品

(2006年2月28日 資料室委員会作成)

はじめに

本校は楽善会(1875年)の創設以来、訓盲院(1879年)・訓盲哑院(1884年)・東京盲哑学校(1887年)・東京盲学校(1909年)・国立盲教育学校ならびに同附属盲学校(1949年)・東京教育大学国立盲教育学校および同附属盲学校(1950年)・東京教育大学雑司ヶ谷分校(1951年)・東京教育大学附属盲学校(1973年)・筑波大学附属盲学校(1978年)と名称が変わっていますが、一貫して盲教育を中心としての長い歴史があります。

そしてその歴史は、盲教育に関わる多くの人々の絶え間ない努力や熱意によって支えられてきました。

本校資料室にはそのような痕跡を残す資料が数多く保存されています。その多くの所蔵品の中の一部を写真と共に掲載しました。日本の盲教育の歴史を紐とく一助になれば幸いと存じます。



楽善箱は、東京盲哑学校時代に寄付を集めるために作ったものです。

展示してある箱は明治43年盲哑分離した当時のものです。



資料展示室

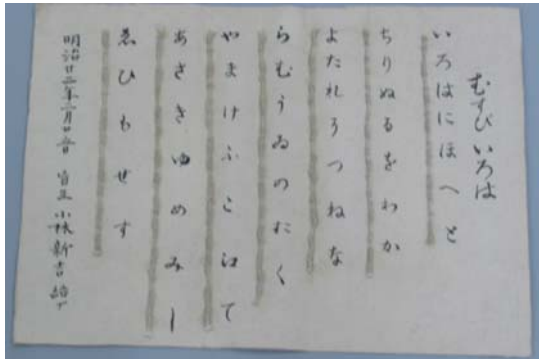
写真 赤池信夫 藤原敬司ほか
作成 吉澤昌江

目次

1. 日本における凸文字以前の盲人用符号文字
 (1) むすび文字 (2) 通信玉 (3) 折り紙文字
2. 日本における凸文字
 (1) 紙撚（こより）文字 (2) 松脂（まつやに）文字
 (3) 蠟盤（ろうばん）文字 (4) 瓦（かわら）文字
 (5) 木刻漆塗文字 (6) 木刻凸凹文字
 (7) 教授用凸文字
3. 針文字
4. バルビエの12点点字
5. ルイ　ブライユ
6. 石川倉次
7. 点字盤
8. 点字タイプライター
9. 計算器
10. 掛け図
 (1) 塙保己一 (2) 杉山和一 (3) 山田斗養一
 (4) 盲生掌書背書の図 (5) 遊歩場嬉戯図
11. 検校の装束
12. 楽善会訓盲啞院記録
13. 卒業証書

1. 日本における凸文字以前の盲人用符号文字

(1) むすび文字



盲生徒であった小林新吉（新潟県出身）の結んだもので、木綿糸を撚って作り、結び目の数と距離によって、いろはをあらわしている。

(2) 通信玉



明治22年平野知雄により考案されたもので、大小2種のガラス玉を、結び目を境として上下2段に置いたもの。

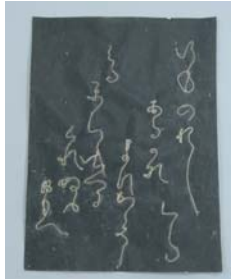
(3) 折り紙文字



四角い紙片の角を折り、その折り方により文字を定めている。

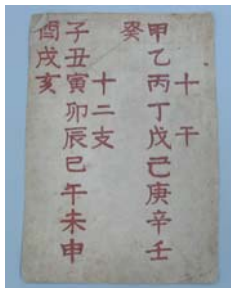
2. 日本における凸文字

(1) 紙撚（こより）文字



厚紙の上に糊をつけた紙撚（こより）で字形を作ったもの。

(2) 松脂（まつやに）文字



折板を温湯の上に置き、溶解した松脂で書き、これに煎糠（煎じたぬか）を撒いて作ったもの。
文字だけでなく楽譜や地図もこの方法で書いた。

(3) 蠟盤（ろうばん）文字



西欧では18世紀後半以後広く行われた方法で、我が国では京都盲啞院、楽善会訓盲院ともに使用している。
蠟を鍋に入れて煮、溶解するときブリキ盤に流し込み乾燥させてから、竹片で字を書く。

(4) 瓦（かわら）文字



盲人であった飯島静謙が自分で焼竈を作り制作した。4 cm×3 cmの瓦片に文字が浮き出している。

(5) 木刻漆塗文字



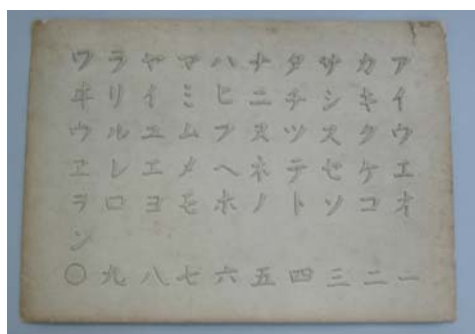
明治9年頃、楽善会員諸氏が本校創設に熱中している際に、盲人某氏が教授用として本器を工夫して寄贈したものである。
元来は鉛製を工夫してあったが、たびたび紛失の憂いがあったので木製に変更したものである。
(高津柏樹談)

(6) 木刻凸凹文字



4. 5cm四方の木版の表に凸文字、裏に凹文字を刻したもの。当時の大蔵省書記官である得能良介氏が制作、明治13年に寄贈された。

(7) 教授用凸文字



「明治事物起源」に「盲生用凸文字習書出版の始は明治9年11月なり。」と記されている。
本校には数多くの凸文字教科書が残されている。これらの凸字教科書の製造に最も力を入れたのが山尾庸三である。

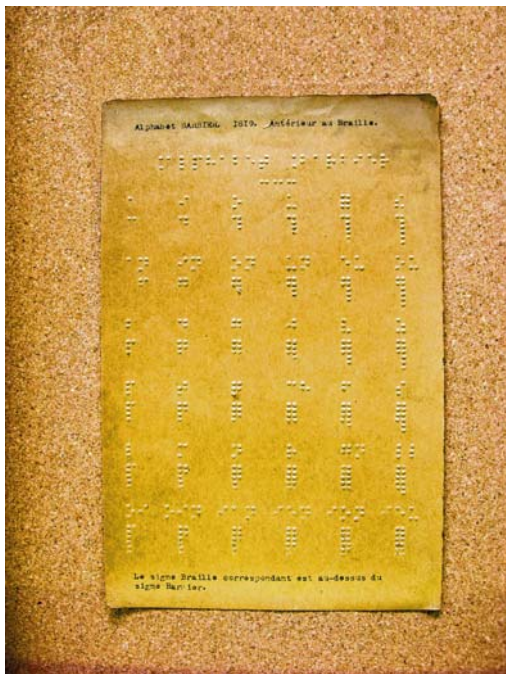
3. 針文字

針文字は従来使用していた通常文字と点字との中間にあって、しかもバルビエの点字発明の原因になったとも言われ、訓盲文字歴史上特に留意しなければならないものである。

クラインの発明した針文字というのは印刷用活字とは別に一種の活字を作り、その下部に一群の針を付着させて上部の文字と同じ形にしたもので、読むときは活字を使い、書くときは針を紙に突き刺して出来る文字を言うのである。我が国では楽善会訓盲院、京都盲啞院ともに使用した。



4. バルビエの12点点字



フランスの砲兵大尉 Charles Barbier (1767～1841) は点文字を考案した最初の人である。考案の動機は、軍の暗号のためであった。バルビエの点字は種類が多いのだが、最後に縦6点2行の12点点字に到達して1822年発表した。

これは、中村京太郎氏(初代点字毎日編集長・1880～1964)がパリのプアラノタノ・アウイー協会点字図書館で懇請、ようやく入手し日本に持ち帰ったものである。

5. ルイ ブライユ

ルイ ブライユはバルビエの12点を3点2行の6点と小さな線の組み合わせで文字や記号を作った。その後、線は書きづらいということで6点だけの点字に改良した。



6点点字発明者、ルイ ブライユの胸像の写真

6. 石川倉次

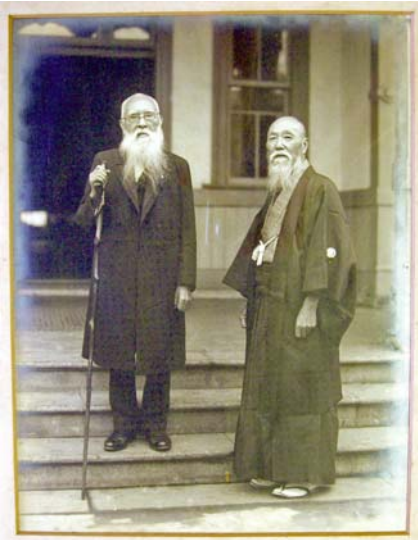
石川倉次先生は安政6年浜松に生まれ、明治12年千葉師範学校を卒業後小学校を歴任し、明治19年訓盲院に奉職当時盲人は凸字によって教育を受けていたが、先生は小西信八先生からブライユ点字を翻案することを同僚に奨められ、生徒と共に三年間苦心研究の結果

ようやくに完成を見、採用されることになった。

先生はその後も常に点字に関する研鑽を重ね、大正15年東京盲啞学校を退職後もその指導に精進し、日本点字の父と仰がれた。昭和19年86歳で永眠された。

昭和40年12月

日本点字70周年記念事業委員会



昭和12年撮影(左 小西信八 右 石川倉次)の写真

7. 点字盤

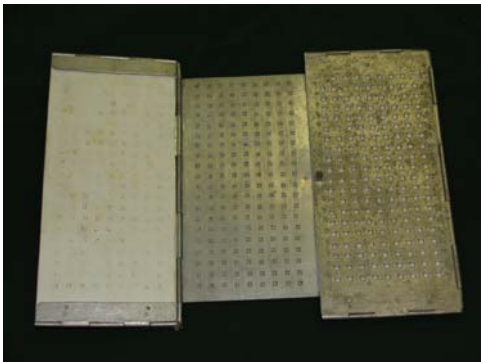


フランス式点字盤



算術用点字盤

明治36年頃使用



南雲総次郎氏考案数学用点字盤

南雲氏は鹿児島盲啞学校、旭川盲啞学校の創始者である。



投票用点字盤

明治時代に用いられたもの

8. 点字タイプライター



フランク・H・ホール氏 考案

ホール氏が1892年、米国イリノイ盲学校長の際に考案したもの。



石川倉次氏 考案

12キーで、明治36年作成のもの。

キーが12あるのは濁音、半濁音が一度に打てるようにしたためである。イシカハタイプライターと名付けた。



アイデアルライター

ドイツ製ライターにヒントを得て、京都府立盲学校同窓会が昭和5年に発売した。

9. 計算器



岸高式算盤

岸高丈夫氏 考案

珠は菱形でなく、将棋の駒形にして、上下に移動しないように工夫されている。



テラー計算器

ウィリアム・テラー（1842～1922）はケンブリッジのトリニティカレッジに学び、後に同大学数学講師となったが、5年後失明し、1907年数学記号を完成した。東京盲学校では明治37年より使用した。

10. 掛け図

塙保己一検校（はなわ ほきいち けんぎょう）の肖像画



江戸時代の国学者。古代から江戸時代にかけて530巻666冊・1,270種の国書を収録している。塙保己一検校が書き著した「群書類従（ぐんしょるいじゅう）」和綴じ本は666冊すべてが資料室に揃っている。

杉山和一検校（すぎやま わいち けんぎょう）の肖像画



盲人の職業としての「はり治療」を確立した。

山田斗養一検校（やまだ とよいち けんぎょう）の肖像画



箏曲山田流の創始者。

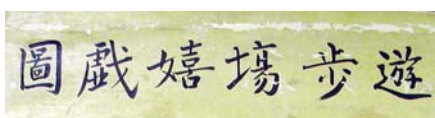
盲生掌書背書の図（拡大）



明治13年 有馬孝山画

掌書法 盲人の掌中へ指頭にて字形を書く法なり。背書法 多角文字にして運筆を了解しがたきものは背部一面に指頭もて大書するなり。（古川氏盲啞教育法より）

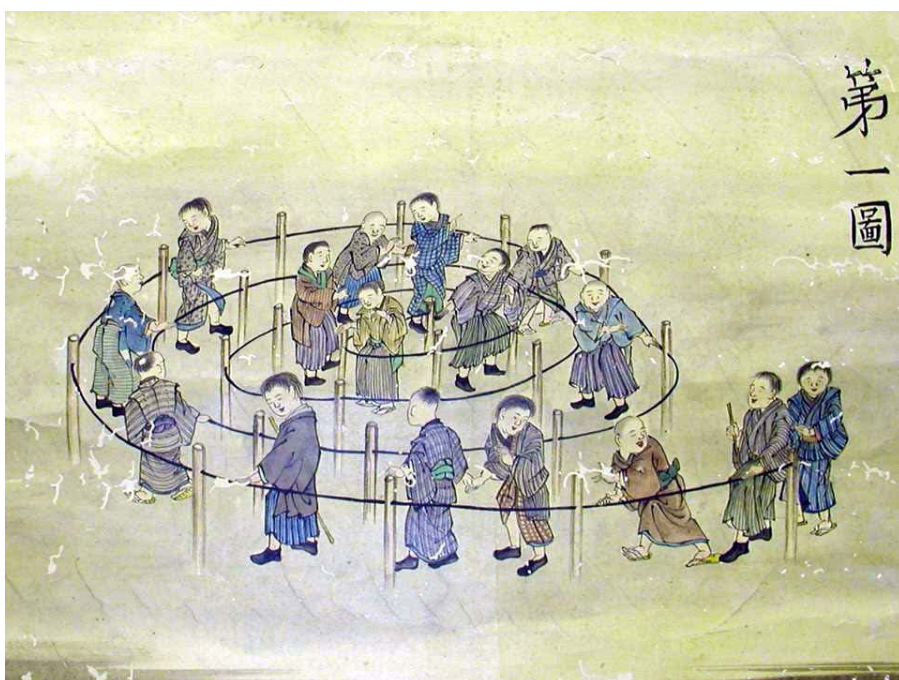
遊歩場嬉戯図



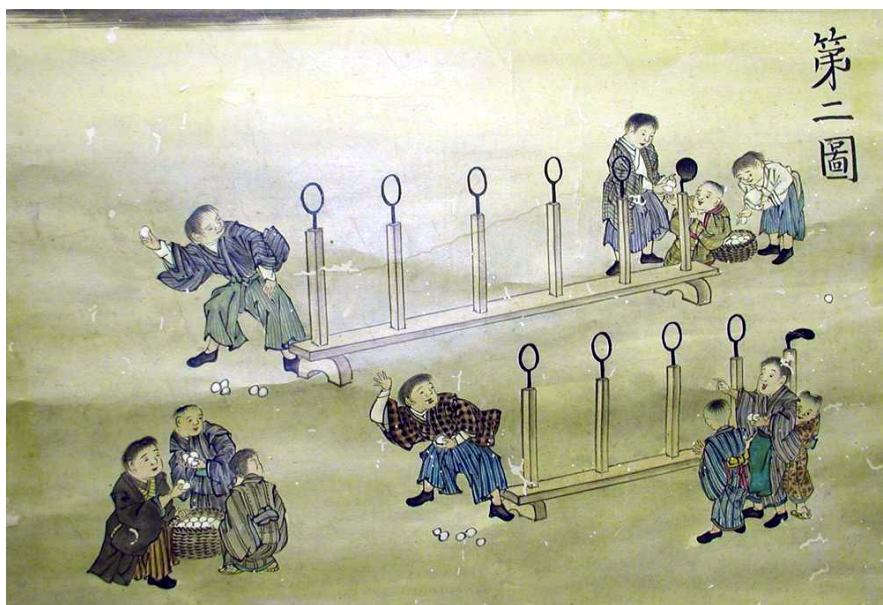
この掛図の遊歩場嬉戯図のタイトルは世界百科事典に掲載されている。

第一図 渦線場

（渦巻き線の中を歩き、その位置の東西南北を把握させる。）



第二図 輪投げ（輪の中に玉を投げる。）



第三図 打毬聴音場（壁に玉を投げ、当たった場所の様々な音を聞いて空間を確認する。）



1 1. 検校の衣裳

盲人で官位を有する者はその官位を明らかにするため官位によって服装・杖を異にした。この制度の初めは後花園天皇のとき、小池惣一という当道屋敷の総検校が小松院の寵愛を受けて紫衣を賜り、「以後検校は紫衣を着せよ」との宣旨を賜った時からであると言われている。



検校の礼服としての天台宗の紫衣
(袈裟なし)

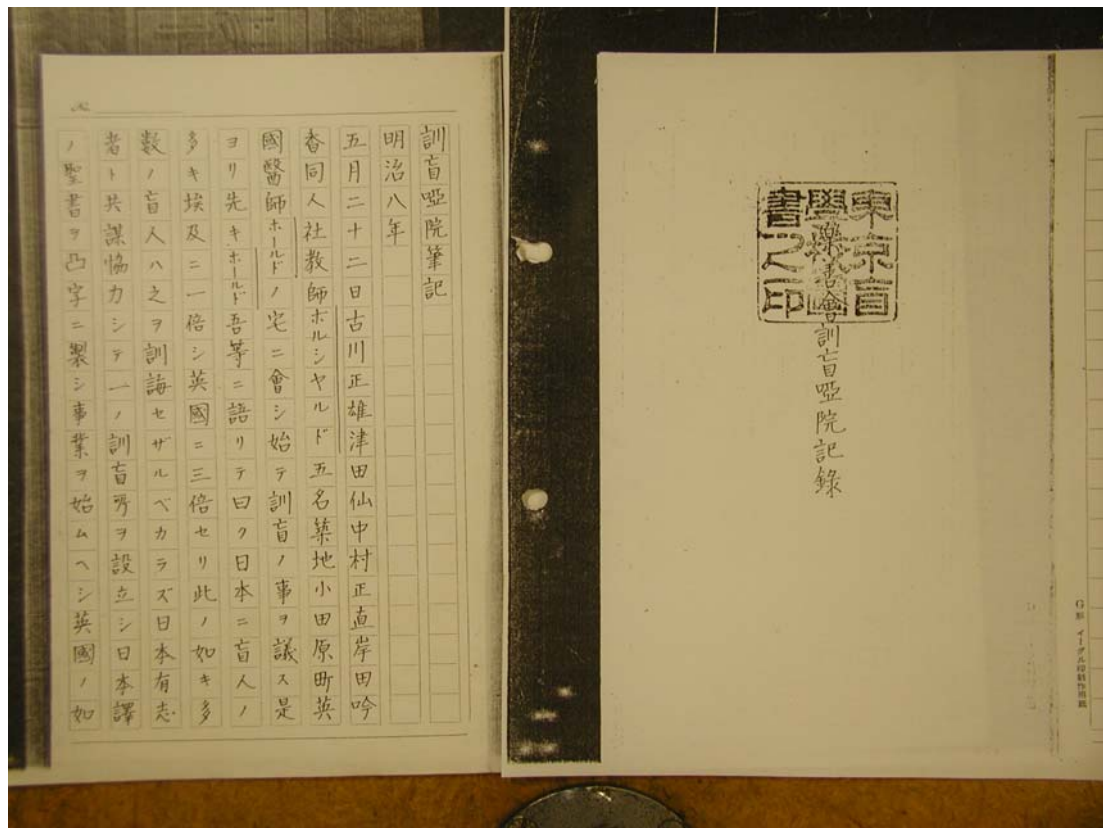


後ろから見た写真



紫素絹白長袴

1 2. 樂善会訓盲啞院記録



明治8年5月樂善会創立から明治18年10月12日までの記事が記載されている。原本は消失したため、ペン書きしたものを秋葉馬治校長が昭和7年寄付。巻末には「明治18年11月 中村正直未定編纂」とあり、文部省直轄までの樂善会史である。

1 3. 卒業証書



東京盲啞学校鍼按科の卒業証書の縁取りは検校杖がデザインされていた。



東京盲啞学校の写真

